

SD尺度とファジィ評定尺度による服装に対する評定値の比較

○近藤信子・ 福井典代** 藤原康晴**

(*中国短大 **鳴門教育大)

【目的】これまで、服装に対するイメージや嗜好は「やや」、「かなり」、「非常に」などのカテゴリーをもつSD尺度やリッカート尺度を用いて測定されてきた。その場合、評定者はそれらの尺度のいずれかのカテゴリーで回答することになるが、実際に判定するとき「やや」と回答するか、「かなり」と回答するか迷うことがある。さらに、これらのカテゴリーそのもの「やや」、「かなり」はあいまいさを含んだ言葉である。したがって、服装のイメージを測定するとき、尺度上のある一点のカテゴリーで回答を求めるよりも、尺度上のある区間で回答を求めるほうが評定者がいただいているイメージをより正確に測定することができると考えられる。後者、つまり、判定に幅をもたせた回答法はファジィ評定法と呼ばれ、最近、竹村が詳細に検討している。本研究では、服装のイメージをこのファジィ評定法を用いて測定し、従来のSD法による測定結果と比較した。

【方法と結果】20歳前後の女性の街着をファッション雑誌などから50種類収集し、写真複製によって大きさを統一した。この各服装を「レストランで開かれる親しい友人の誕生日会」で着ることを想定して、「派手/地味」、「ドレッシー/カジュアル」の観点から判定(サーストーン法)してもらい、それらの中間のものを含む各1種、計6種の服装を提示試料とした。各服装を「若々しい/大人っぽい」など服装評価の代表的な10尺度を用い、SD法とファジィ法で(別の判定者によって評定)測定した。その結果、SD法で測定したときの評定平均値は、ファジィ法で測定したときの判断の幅の範囲内になった。しかし、SD法における標準偏差値の大きさはファジィ法の判断の幅とは対応しないことがわかった。